まんぢうのさうし

室町時代末期写　2冊
縦32.2cm　横22.0cm

夏目漱石の小説『坊ちゃん』には「多田の満仲の後裔だ」と主人公が語る場面があります。この「多田の満仲」とは、平安時代中期の武将で、越前、武蔵などの国主を歴任し、摂津国川部郡多田（現在の川西市）を所領した源満仲のことです。満仲の出家譚については、説話として伝わり、説経、舞曲へと展開しました。本書『まんぢうのさうし』は、満仲と息子の物語を幸若舞とし、その台本に色鮮やかな挿絵を加えた奈良絵本です。

多田満仲は、優れた武将でありましたが、仏道に目覚め、息子の美女御前を寺へ修行に出しました。しかし、美女御前には仏教の修行をする気持ちは全くなく、数年が過ぎても御経を読むことすら出来ません。満仲は美女御前に激怒し、家臣の仲光に美女御前の首を刎ねるように命じました。仲光は苦悩の末、自分の息子幸寿丸の首を刎ね、満仲に差し出しました。幸寿丸が自分の身代わりとなったことを知った美女御前は比叡山の恵心僧都の弟子となり、仏教の修業に励みました。数年後、出家し円覚と名のり、多田の里を訪れますと、父の満仲は息子の死を深く後悔しており、母は悲しみのあまりに、盲目となっていました。円覚が御経を唱えると、仏像から金色の光が差し、母の目が見えるようになりました。円覚は両親に自分の正体を明かし、親子は再会を喜び、ともに亡き幸寿丸の菩提を弔いました。

涙を流しながら、幸寿丸の首を刎ねる仲光

幸若舞とは室町時代に流行した舞の一つで、軍記物語を題材としたものが多く、その台本は読み物としても親しまれました。

（天理図書館　西田裕美）

天理図書館のお知らせ　Tel：0743 - 63 - 9200　http://www.tcl.gr.jp/
◆平日（午前９時～午後５時半）　土・日・祝（午前９時～午後４時半）
○11月の休館日：23日・30日
（本欄にて紹介した名品の閲覧については係へお尋ねください）